

魅せられて 私の「歌」道標

ロード

十代の頃の思い出

大島史洋



三月二十二日の毎日新聞（朝刊）の「アララギ終刊へ 結社も解散」という記事を見て大きな衝撃を受けている。私はアララギ会員ではないけれど、父が古くからの会員であり、私が短歌を作りはじめたのもそれが基礎となっているからである。

私は父のすすめによって「アララギ」の系列誌である「未来」という雑誌に入会した。「未来」は父と同年生まれの近藤芳美が中心の雑誌であり、父の言葉によれば、そこには岡井隆という有望な青年がいるので一緒に勉強して教えてもらおうのがいちばん良い道だろうということだった。今から三十七年前、私が十五歳で高校一年生のときである。それ以来私は「未来」と共に「アララギ」にも機会があるたびに親しんできたから、今度のことは他人事とは思えず、残念な気持ちでいっぱいである。

岡井隆の父岡井弘もアララギ会員で名古屋に住んでいた。私の父は隣の岐阜県中津川市に住んでいたのでお互いに少しは交流があったようである。そんなところから岡井隆の名前が出たのだろう。「未来」は昭和二十六年に創刊されているから、私が入会した昭和三十五年

十月の時点ではまだ創刊九年目という若い雑誌だった。いまそれを取り出して見てみると三〇から四〇ページという薄さである。

私の歌がはじめて活字になったのは、その昭和三十五年の秋に行われた中津川市の短歌大会のことだった。私の出した作品が川田順の選によって天賞となり、新聞の地方版にその歌会の記録が出たからである。今でもよく覚えていて、県立中津高等学校の暗くて広い板張りの中央廊下に新聞が何枚も（たぶん各紙の地方版ばかりが）張り出されてあって、その短歌大会の記事を見た安藤という友達に、「これ、君のことか？」と聞いたのである。私はその時はじめて新聞に載っているのを知り、とてもうれしかったのだけれど、よく見てみるとそれは「大島史郎」と誤植されていた。だから、よく覚えているのである。

その時の歌は、

街の灯と星との層のなかにして吾も一点
の灯の下に住む

という一首である。中津川市は盆地の街であり、私の家は高台の斜面にあったから、そこから見ると下はたくさんさんの街の灯、中間にはすこし暗い反対側の高台があつてそこにも点々と灯が散らばり、さらにその上には星がたくさん輝いていた。まだ高層の建物がひとつもない頃だったから、とても眺めはよかった。いつも見ていたそんな景色をうたったこの一首を、父が短歌大会に歌を出すというので私も一緒に応募してみたのである。

はじめて短歌を作ったのはたぶんそれより一年くらい前で、中学校の国語の授業で作られたのが最初である。そのとき作った歌は「青き田に子供の遊びし靴のあと雨水たまりて白く光れり」というものであった。授業の終わりが来て作品を提出するとき、まだできていない生徒に対して先生（内田守弥先生だったと思う）が、できたところまで言ってみるとある生徒に命じたところ、チャイムが鳴って教室がざわざわしていたので、彼はとっさに「がやがやとうるさき」と答えた。すると先生がそんな「がやがやと」なんていう言葉は歌にならん、と応じたので、みながどっと笑つたのを覚えていゝる。内田先生という人は松山の生まれなのに、どういふわけか私が通っていた中学校（市立第二中学校）の校長であつた三宅武夫先生に私淑して中津川に来てしまい、三宅先生の下で教師になつたといふ変わり種の人である。あるとき私の顔を見て、大島、おまえの目にはこつとる、とも言われた。内田先生は、教壇で五百円札を出して見せながら、この一枚があれば長与善郎の『わが心の遍歴』（当時出たばかりだった）が買える、などと言われたこともあつた。先生は中学校を退職された後はまた松山に帰られ、いまも御健在である。短歌のことに話をもどすと、その後、当時あつた「中学時代」と

か「中学コース」「高校コース」といった雑誌の短歌欄に応募して万年筆やノート、鉛筆などをもらった。万年筆をもらったのは一度だけだが、当時は万年筆のような貴重品は持っていなかつたので、とてもうれしかったことを覚えている。高校に入ってしばらくした頃、担任の先生が私あてに封書が来ているといつて持ってきてくれたことがある。いま「蘭車」という雑誌を出している緑川浩明（当時は緑川浩陽といつたと思う）からの手紙であつた。先に述べた学年雑誌の短歌欄では作者の名前の上に高校名が添えられていたので、高校あてに便りをくれたのだつた。文面は一緒に雑誌を作らないかというものだった。文面もさることながら、ちよつと癖のあるその字がとてもうまく見えて、こんな字を書く高校生がいるのかと驚いた記憶がある。誘われた雑誌の名前は「むらほし」といつて今の「蘭車」の前身である。緑川は本俣修もとたけおさむの「形成」にも所属していたので、雑誌名は本俣の歌集名にちなんで付けたようだった。高校二年の夏に上京したとき一度その会に出たことがあるが、私は「未来」に入会してそちらのほうに興味が移つていたので、それきりになつてしまった。ただ何度か歌の批評方法についての疑問を緑川に対して書き送つた記憶がある。その雑誌にもう一人、会つたことはないが、歌がうまくて字のきれいな学生がおり、手紙をもらつてびっくりした記憶がある。名前は河野典生といつたと思うが、間違つてゐるかもしれない。

私の歌が「未来」に載つた最初は昭和三十六年（一九六一年）の一月号である。当時の雑誌を見てみると、こんな歌が載つてゐる。

革命の意義を説きいし英語教師今日はこれまでと言つて出でたり

銃殺ののち弾丸の尽きるまでうたれしというルムンバ悲し

首のなき石像の立つ野の道のはては戦死者の墓地に入りたり

二首目の歌に出てくるルムンバのことは強く印象に残っている。たしかルムンバの死を悼んでモスクワに民族友好大学が設立されて日本からも入学できるということだったので、日ソ協会から願書を取り寄せたことがあった。高校三年のときである。まずロシア語を勉強する課程があったように記憶している。

ほかに、「我が知らぬ国にてついになし遂げし人間衛星の祝報を聞く」「革命の話と英語の授業をうまく切り変える先生が信じられぬい」「留学のきまりし兄と会に集い日陰者のこととき身を感じいき」などといった歌もあるから、早く中津川から出ていって、もっと広い世界を見たいと思つていたようだ。

当時読んだ歌書で覚えているものは、土屋文明『短歌入門』、近藤芳美『新しき短歌の規定』、『現代短歌』、斎藤喜博『表現と人生』、高田浪吉『現代短歌の鑑賞』、杉浦明平『現代短歌茂吉文明以後』などであるが、いずれも父の書棚にあったものである。このなかで、短歌というよりもむしろ考え方の上でいちばん影響を受けたのは斎藤喜博の本かもしれない。

自分ではじめて買った短歌関係の本は岸上大作の『意志表示』で

ある。岸上は昭和三十五年の十二月に自殺し、その死をめぐつての特集が「短歌（角川書店）で行われたので、興味をもって読んでいた。『意志表示』が出版されたのは昭和三十六年の六月である。たぶん私はその前後の月の総合誌の広告を見たのだろう。中津川市の梅村書店に注文をしにいったことを覚えている。いま、その『意志表示』を取り出して裏見返しを見てみると、私のきたない字で「一九六一年七月十一日読了」と書かれている。なつかしきかな、である。

その後、高校二年の終わりから三年生の頃は「未来」に歌を投稿していない。受験勉強をしながら、これが終わって大学に入ったら本格的に作ろうと思つていた。

昭和三十八年三月、私は慶応大学の文学部に入学するため上京する。四月には「未来」の東京歌会の折に近藤芳美宅をはじめ訪問する。そしてその後は毎月歌会に出席し、近藤芳美をはじめとして、岡井隆、我妻泰（現在の田井安曇）、吉田漱、金井秋彦、石田比呂志といった人たちとの長い付き合いが始まることとなる。

上京したての頃の「未来」には、次のような歌が載っている。

野良犬の如く雨の中をうろつきて駅を一
つ歩き通しき

打算に芸術は否定されると語りいてここ
に小さき二人の存在

砲丸を雨ふる中に投げあいぬ時おりには
げしくぶつかりて落つ



昭和48年当時。後列左から三人目＝近藤芳美。前列左より、筆者、石田比呂志、我妻泰(現・田井安曇)、大河原惇行、吉田漱。

「未来」一九七七年五月号
大島史洋

運	て	か	わり	任	み	か	ゆる	べ	く	空	地	に	は	相	の	花	た		
か	く	蒼	を	か	か	く													
み	す	か	ら	さ	あ	と	し	め	て	の	ち	言	い	今	を	通	し	は	じ
め	る	軽	口	あ	ま	た													
パ	ー	ラ	ー	は	パ	ン	コ	店	に	て	授	冬	扇	ま	わ	り	穴	よ	
リ	玉	音	心	心	く														
持	ち	あ	げ	て	お	ろ	さ	り	子	た	心	抱	擁	の	か	た	ち	に	蟹
の	脚	が	揺	れ	る	よ													
あ	げ	つ	ぶ	う	論	の	聲	し	さ	明	日	は	出	て	て	討	死	さ	す
る	小	兵	の	よ	う	ち													

大島史洋

(おおしま・しやう)

昭和19年、岐阜県中津川市生まれ。昭和35年「未来」入会。近藤芳美・岡井隆に師事。現在、編集委員・選者。出版社に勤務。歌集に「藍を走るべし」「時の唄」「四隣」など六冊。評論集「定型の視野」「定型の力」など。千葉県習志野市在住。

足に合わぬ細長き靴部屋隅に黒光りして
愛思うとき
うす暗くしめりし部屋に帰り来て消毒薬
をはき集めいつ

一首目は、東京が珍しくて歩きまわった時の歌である。砲丸の歌は体育の授業の時だろう。私が最初に住んだアパートは陽のさきない三畳の部屋で、共同の下駄箱が狭くて靴が入らず、部屋の隅に置いて暮らしていたのである。私は毎月の歌会で「未来」の人たちに出会ったのが一番の楽しみだった。近藤、岡井、我妻などを通して、「アララギ」の歌人たちがいよいよ身近になり、正岡子規や伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、古泉千樫、斎藤茂吉、土屋文明などを知っていった。

いま、「アララギ」終刊の時代を迎えて、私の思いは複雑である。